

# 第45回現代短歌大賞授賞式報告

生沼義朗

二〇二二年十二月二十二日(木)  
午後六時より、東京・神田の学士会館で第四十五回現代短歌大賞授賞式が執り行われた。いわゆるコロナ禍が収まらないため、二〇二二年六月の第六十七回定時総会および第六十六回現代歌人協会賞授賞

方で先日亡くなられた名誉会員の篠弘さんと来嶋靖生さんのご冥福をお祈りするとともに、今までのご尽力に感謝申し上げたい」との挨拶があり、篠弘・来嶋靖生両氏に対して黙祷が捧げられた。

式同様、マスク着用やソーシャルディスタンスの確保といった感染対策を講じた上で開催され、役員・一般会員および関係者約八十名の出席を得た。  
司会の大松達知氏が開会を宣言し、栗木京子理事長から「コロナの影響で今年も思うような活動は難しかったが、まもなく刊行される『続コロナ禍歌集』は会員の皆様のお陰で充実したアンソロジーとなった。困難中でも繋がりが持てたことは希望であり、来年も皆様のご尽力をお願いしたい。一

続いて、第四十五回現代短歌大賞授賞式が行われた。受賞対象は小池光歌集『サーベルと燕』（砂子屋書房刊）ならびに過去の全業績で、栗木京子選考委員長から選考経過の報告と受賞者紹介がなされた。次いで小島ゆかり選考委員から「二人のお嬢さんとの交流の歌は、様々な場面が家族像だけでなく一人暮らしの父親と娘たちの静かなドラマを立体的に進行させている。他の人が詠めば平凡になりかねない題材も、一言の工夫でこの作者にしか詠めない歌になる」と、坂井修一選考委員から「受賞は満場一致で、歌に面白さや人間らしさがある。一見散文的に見える歌も、ここに至る軌跡を考えると味わい深い。（大きな物語）の中で生きない強い意志と複雑な感情を感じた」との祝辞があった（選考委員のうち穂村弘氏は欠席）。



出席者を代表して藤原龍一郎氏から「小池さんと私はちょうど五十年前の同じ号の『短歌人』に初めて作品が掲載された同期で、当時は現在とまったく作品傾向が違い、用語や語法が前衛短歌の影響を受けているのは興味深い。青春性を脱却して成熟円熟する過程を間近に見てきたので、受賞は私にとっても大変嬉しい」との祝辞が述べられ、受賞を祝した。  
小池光氏へ栗木理事長から賞状と副賞の授与、受賞者への花束贈呈に続き、受賞者挨拶では小池光氏からユーモア溢れるエピソードを織り込みつつ、「『バルサの翼』

で現代歌人協会賞を受賞したのは四十年以上前で、授賞式が学士会館の今日と同じ部屋だったことをよく覚えていて。短歌を始めて五十年間一度も短歌を離れなかったのは人との繋がりが、ひいては短歌の方だと思う。これからもしばらく短歌とつきあって、また新しい世界を作れるように励みたい」とのスピーチがあった。  
今回の新会員紹介は進行の都合上、栗木理事長と坂井副理事長を交えた記念撮影を先に行い、その後席に戻った新会員が名前を呼ばれ立札する形で紹介がなされた。  
二〇二一年は新会員紹介の機会が持てなかったため、今回は二〇二〇年から二二年まで三年間の新会員のうち、当日出席のエリ、大西久美子、大森浄子、古志香、下田裕子、水門房子、鈴木和雄、鈴木陽美、千種創一、中村敬子、比留間澄子、藤田久美子、古澤りつ子、増田啓子、水野信子、門間徹子（敬称略・五十音順）の十六氏が紹介され、各年度を代表して二〇二〇年度入会の鈴木陽美、二〇二一年度入会の古志香、二〇二二年度入会の大西久美子の三氏からそれぞれ挨拶があった。  
通常は懇親会が行われるが、今回も状況を鑑みて実施が見送られたため一時間ほどで式典は終了し、最後に司会者の閉会挨拶で締めくくられた。